

ねんかんだい しゅじつ
年間第24主日

ねん がつ にち
2020年9月12日

きくち いさおだい しきょう せつきょう
菊地功大司教 ミサ説教

「あわれみ豊かな神をイエス・キリストは父として現してくださいました」

きょうこう
教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅「いつくしみ深い神」は、この言葉で始まります。

うえ きょうこう しゃかい にんげんてき きょうかい にんむ
その上で教皇は、社会をさらに人間的にすることが教会の任務であるとして、
こう指摘します。

しゃかい にんげんてき おお ようそ も にんげんかんけい しゃかいかんけい
「社会がもっと人間的になれるのは、多くの要素を持った人間関係、社会関係
なか せいぎ なく 福音の救世的メッセージを構成しているいつくし
み深い神を持ち込むときです。(14)」

ほんじつ だいいちろうどく しよ ふくいん わかい しろ
本日の第一朗読であるシラ書も、マタイ福音も、ゆるしと和解について記して
います。

じぶん たしや なか お たいりつ たが りかい
自分と他者とのかかわりの中で、どうしても起こってしまう対立。互いを理解
することが出来ないときに裁きが起こり、裁きは怒りを生み、対立を導き出
してしまいます。シラ書は、人間関係における無理解によって発生する怒りや
たいりつ じぶん かみ かんけい ふか えいきょう してき たしや たい
対立は、自分と神との関係にも深く影響するのだと指摘します。他者に対し
て裁きと怒りの思いを抱いたままで、今度は自分自身が神との関係の中でゆる
しをいただくことは出来ない。

とうぜん かみ め た そんざい かみ のぞ みち
当然わたしたちは、神の目においては足りない存在であり、神が望まれる道を
しばしば外れ、繰り返し罪を犯してしまいます。そのたびごとに神に許しを請
うのですが、神はまず、自分と他者との関係を正しくせよと求めます。ゆるし

と和解を実現しなければ、どうして神にゆるしを求めることができるだろうかと、シラ書は指摘します。

マタイは、借金の帳消しに関わる王と家来とその仲間の話を持ち出し、イエスの言葉として、「七回どころか七の七十倍までもゆるしなさい」と言う言葉を記しています。もちろん490回ゆるせばよいという話ではなく、七の七十倍という言葉で、ゆるしの限りない深さを示します。

なぜゆるし続けなくてはならないのか。それをパウロはローマの教会への手紙で、「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです」と記すことで、わたしたちの人生は、主ご自身が生きられたとりに生きることが目的なのだと言います。

そして、わたしたちが倣おうとしている主イエスは、自らの命を奪う者を十字架上でゆるすかたであり、まさしくヨハネ・パウロ二世が言われるように、「あわれみ豊かな神を・・・父として現して」くださる方です。ですからわたしたちは、あわれみ・いつくしみそのものである神に倣い、徹底的にゆるし、和解への道を歩まなくてはならず、それはわたしたち一人ひとりの性格が優しいからではなくて、主イエスに従うのだと人生の中で決めたのだからこそ、そうせざるを得ないのであります。

わたしたちはこのところ、どちらへ進んだらよいのか迷い続けるはつきりしない状況の中に取り残されているような思いを抱えています。感染症の事態は終息はせず、今日もまた、懸命にいのちを守るため努力を続ける医療関係者の方々がおられます。医療関係者の働きに敬意を持って感謝すると共に、迷い続けながらも、やはりいのちを守るために慎重な行動をとりながら、わたしたちもともに最善の道を模索し続けていきたいとおもいます。

人生には不確定要素がつきものだとはいえ、いわば五里霧中のような状態が続けば続くほど、わたしたちは不安が増し、心に壁を築き上げ、自分を守ろうとするがあまり、人間の身勝手さが社会の中で目につくようになってしまいます。

自粛警察などという言葉も聞かれましたが、他者の言動に不寛容になるのは、自分の世界を守ろうとする心の壁を強固に築き上げているからではないでしょうか。徹底的に異質なものを排除し、心の安定を得ようとするのは、それだけ心に余裕が失われているからではないかと思えます。攻撃的な声もここに聞こえてきます。感染症に限らず、例えば暴力的な行為の被害を受けた人に対する攻撃的な言動には、理不尽さを越えて、いのちに対する暴力性すら感じさせられます。わたしたちは、心を落ち着けて、何を大切にしないでいいのかを、今一度心に思い起こしたいと思えます。

東京ドームでのミサ説教で、教皇フランシスコは、「キリスト者にとって、個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です」と指摘されました。

またこのカテドラルに集まった青年たちに、「恐れは、つねに善の敵です。愛と平和の敵だからです。優れた宗教は、それぞれの人が実践している宗教はどれも、寛容を教え、調和を教え、いつくしみを教えます。宗教は、恐怖、分断、対立を教えません。わたしたちキリスト者は、恐れることはない弟子たちに言われるイエスに耳を傾けます。どうしてでしょうか。わたしたちが神とともにおり、神とともに兄弟姉妹を愛するならば、その愛は恐れを吹き飛ばすからです」と呼びかけられました。

長期にわたる感染症の事態のなかにあって、あらためてこの教皇の言葉を思い起こしたいと思えます。いまわたしたちに必要なのは、愛と平和のための行動

であり、いつくしみという判断基準はんだん きじゆんです。

もっとも、神かみのいつくしみは、ただただ優やさしければよい、何でもかんでも咎とがめることなくゆるせばよいと言っているわけでもありません。何でもゆるされて、何をしても良いというのであれば、この社会しゃかいに共同体きやうどうたいは存在そんざいできません。わたしたちは、ただばらばらになってしまうだけだからです。七の七十倍なな ななじゅうばいのたとえは、犯おかした罪ざいの責任せきにんを免除めんじよするものではありません。

教皇きやうこうヨハネ・パウロ二世は、回勅かいちよく「いつくしみ深い神ふか かみ」にこう記しるしています。

「出し惜だ おしみしないでゆるす要求ようきゆうが、正義せいぎの客観きやつかん的諸要求てきしよきゆうを帳消ちやうけしにするわけではないことは言うまでもありません。・・・福音ふくいんのメッセージのどのあたりを見ても、ゆるしとか、ゆるしの源泉げんせんであるいつくしみは、悪あくとか人ひとをつまずかせることとか、損害そんがいをかけ侮辱ぶじよくしたりするのを許容きやうようするゆるしというような意味いみではありません。どんなときでも、悪あくとか、人ひとをつまずかせたこととかは償つぐない、損害そんがいは弁償べんしょうし、侮辱ぶじよくは埋め合わせう あをするのがゆるしの条件じょうけんとなっています。(14)」

他者たしやの言動げんどうを裁さばくのは、常つねにわたしたちにとって大きな誘惑ゆうわくのひと一つです。特に不安ふあんと不確実ふかくじつさが社会しゃかいを支配しはいするとき、その原因げんいんを求めて他者たしやを裁さばってしまう誘惑ゆうわくが増大ぞうだいします。教会きやうかい共同体きやうどうたいの中にさえ、互ないを裁たがく傾向さば けいこうがあることは、何年なんねんも前まえから指摘してきされてきたことでした。わたしたちは常つねに、裁さばきの共同体きやうどうたいではなく、ゆるしと和解わかいの共同体きやうどうたいになりたいと思おもいます。

教皇きやうこうフランシスコの指摘してきです。「必要ひつようなのは、自分じぶんの過去かこを振り返かえって祈いのり、自分じぶん自身じしんを受け入れ、自分じぶんの限界げんかいをもつて生きることを知しり、そして、自分じぶんをゆるすことです。他者たしやにも同おなじ姿勢しせいでいられるようにです。(「愛あいのよろこび」107)

いつくしみそのものである神かみに倣ならい、互たがいにゆるしと和解わかいを實現じつげんし、神かみの正義せいぎ
に支配しはいされる社会しゃかいの實現じつげんを目標めざしていきましょう。